

1 教育目標

【Be Unique】
○大きく変化する社会状況や価値観、テクノロジーの進化に対応し、未来を生きる生徒に必要な力を育む
○これからの時代に必要なスキルや多様性の許容、そして、進学後や社会人になっても学び続けることのできる生徒の育成
○「なりたい自分」を作り、「やりたいこと」を見つけ、「教えられなくても学べるようになるため」に経験を軸に置いた教育

2 中期的目標

1 新しい教育の実践段階へ サイエンスとグローバル
2 先鋭的・特色的な教育内容の実現
3 「開かれた学校」に向けた教育活動の展開 企業・地域・他校との連携
4 進学実績とキャリア形成
5 生徒募集
6 施設設備の整備

3 学校教育の自己診断と学校関係者評価委員会の意見

学校教育自己診断の結果と分析	学校関係者評価委員会からの意見
① 授業評価アンケート 概ね良い結果であり、2回目でも高評価が維持できている。特に中学では75ポイントの基準を大多数の教員が超えている。 中学 総合評価 第1回 87.6 (97.7%) 第2回 86.7 (97.7%) 学習効果 第1回 81.1 (97.7%) 第2回 84.2 (97.7%) 高校 総合評価 第1回 79.9 (77.3%) 第2回 79.4 (72.2%) 学習効果 第1回 76.6 (60.8%) 第2回 76.2 (63.6%) ※ () 内は75ポイント到達率 ② 保護者アンケート 多くの項目で高評価を得ており、高評価の項目が昨年度の8項目から13項目に増えた。本校の新しい挑戦や教育方針が理解されていると考える。 ※ () 内は中学・高校の割合 ・ わが子を入学させて良かった 93.2% (93.4/93.0) ・ 教職員は、生徒のことをよく考えて指導している 90.5% (92.0/89.1) ・ 教職員は、授業を改善し、わかる授業、力のつく授業の工夫をしている 80.7% (82.7/78.7) ・ 教育課程は、進路希望の実現に対応するものになっている 84.4% (84.1/84.7) ・ 生徒同士がお互いを認め合い、豊かな心の育成ができています 88.1% (87.0/89.2) ・ 学校生活などの諸規定は、納得できるものになっている 89.0% (89.7/88.3) ・ 挨拶や時間厳守など、社会に通用する指導がなされている 92.5% (92.4/92.5) ・ 進路に関する情報を的確に伝え、きめ細やかな指導がなされている 82.7% (79.9/85.5) ・ 将来を考える、進路意識を高める指導がされている 83.1% (80.8/85.4) ・ 施設・設備が整っている 80.7% (78.9/82.5) ・ 部活動や生徒活動が活発に行われている 89.3% (87.5/91.0) ・ 学校行事は楽しく充実している 90.6% (94.2/87.0) ・ ホームページにより学校生活の様子がよくわかる 82.4% (85.2/79.6)	① 委員会の体制 立命館大学理工学部長、学校法人立命館常務理事、保護者会会長、地域有識者、校長、教頭、事務長、主幹 ② 委員会の実施日 2024年5月1日(水) 12:30 ③ 自己評価の結果に対する評価 ・ 俯瞰的に社会を見たり、他者とのコミュニケーションを通して発見したり、自分で動こうとする生徒を育成しようという姿が見える。「開かれた学校」を目指している学校は多いが、初芝立命館のように実践できている学校は多くはない。引き続き実践していただきたい。 ・ 初芝立命館はサイエンスに重点を置いた教育実践をしている。SSHをはじめ理数教育に引き続き取り組んでほしい。女子の理系進学も推進してほしい。一般的に理系から文系への転向はいつでもできるが、文系から理系への転向は難しい。中学の早い時期に文系で行くと決めてしまった時点で、その子の就職の選択肢を奪うことになる。 ・ サイエンスとグローバルを2本柱に教育を進めていることを評価する。身近なところでもグローバル化、多様化が進んでいる。一方、AIの進歩で今までとは違う社会になり、何かが生まれてもすぐに時代遅れになるような世界に生徒たちは生きている。生徒にとっては不安もあるがチャンスもあるので、初芝立命館の生徒の活躍を祈っている。 ・ 堺市で大いに栄えてくれることを期待している。教育は根幹をなすところで、経済効果の面で長い目で見れば大きな力であるので、地域に開かれた学校として今後もお世話になりたい。 ・ 学校行事への生徒の満足度は非常に高く、学んだことを生かしている様子が家庭でも見られるのが印象的だった。

4 本年度の取り組みと達成状況

中期的 目標	今年度の 重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価	次年度に向けての 改善策
1 新しい教育の実践段階へ （サイエンスとグローバル）	(1) サイエンス教育の重点化と実践	① SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の申請 ・生徒の意識調査の継続的实施と分析 ・大学や研究所等との連携（立命館大学理工学部、京都工芸繊維大学、IHI、お茶の水女子大学、グルーヴノーツ、大阪公立大学、堺市学校教育部、日本マイクロソフト、奈良女子大学、国際教養大学） ・サイエンスラボ整備 ・生徒のコンテストや大会への参加（JSSF、国際共同研究、科学の甲子園、観光甲子園など） ② STEAMS 教育 ・Science Technology Art を重視した教育 ③ SSH 先行実践 ・国際共同研究 ・JSSF	① 指定の可否 ② STEAMS 教育が実施できたか ③ 各プログラムに参加できたか	① 計画を実施し、申請。2024 年度より SSH に採択された。 ② 高校 1 年では STEAMS の探究授業を学年全体で取り組んだ。Art ではグラフィックなどを活用した作品を作成した。 ③ どちらのプログラムにも生徒は積極的に、熱心に取り組み成果を上げた。国際共同研究では、高校 1 年生 3 名がシンガポールの生徒 2 名とチームを組み、宇宙物理学をテーマとする国際共同研究に取り組み発表を行った。JSSF では高校 2 年生 2 名がこども向けの糠漬けについて研究し、ポスターセッションを行った。またこの 2 名は実行委員としても活躍した。	① SSH 推進機構を新設、体制を強化。これまで進めてきた教育内容を実践し実績を上げる。 ② 理数探究基礎の実施、西オーストラリアでの生徒研修などを実施する。
	(2) グローバル教育の重点化と実践	① 国際系のコース「US コース」の設置準備 ・イマージョン教育、英語授業 ・APU 近藤教授の Global Citizenship Program ・GRAS との連携による US Quest ・エグゼクティブアドバイザーに国際教養大学のモンテ・カセム学長、APU の米山裕学長 ② 西オーストラリア州との教育提携締結 ③ 中期留学・トビタテ留学 JAPAN ④ 海外研修 ・中学 2 コース制（オーストラリア・ニュージーランド） ・高校 6 コース制（インド・タスマニア・パラオ・韓国対馬・ベトナムカンボジア・北海道） ⑤ 留学生の積極的な受け入れ	① 教育内容と入学者数 ② 包括協定を締結できたか ③ 留学者数 ④ 海外研修の参加人数 ⑤ 留学生数	① 予定していた教育内容の準備は完了した。英語能力やバックグラウンドの多様な生徒が受験し入学した。 ② 西オーストラリア州教育省と包括教協定を締結し、留学先や共同研究を行う学校の視察を実施した。 ③ 中期留学 4 名、長期留学 3 名。トビタテ留学 JAPAN に 4 名。そのうち 1 名は西日本壮行会で代表挨拶をした。 ④ 特に大きな問題もなく実施できた。特にインドへの研修旅行を実施している学校は少なく大きな成果であった。 ⑤ イタリア、ドイツ、タイ、フィンランド、ノルウェーから 5 名の受け入れ。学校に常に留学生がいる環境を実現できている。	① 高い英語力の獲得とグローバルコンピテンスの育成に務める。高校教育課程の具体化。 ② 国際ピア探究（海外の大学との国際共同研究）の学校と内容の選定。 ③ 引き続きプログラムの充実と生徒の意識向上を促す。 ④ 高校では生徒数増加に伴うコースの増設を行う。教員の連携が必須。 ⑤ ホームステイバンクの登録など受け入れ態勢の強化。
	(3) 6 年間での生き方・学び方について考えるプログラムを体系化「未来力」	① 総合的な探究の時間の授業運営と特色化 中 1 身近な環境問題 中 2 STEAM（アートサイエンス）職業調べ 中 3 マイボトルプロジェクト 高 1 STEAMS 高 2 キャリア形成各種講演ビジネスコンテスト 高 3 「100 年を創造するチカラ」（鹿島建設探究教材） ② 教育講演会 ・西脇資哲氏（日本マイクロソフト・エヴァンジェリスト） ・高砂淳二氏（写真家） ・中島さち子氏（数学家・ピアニスト）	① 探究授業を学年で取り組めたか ② 実施できたか	① 学年全教員で担当し取り組むことができた。特に高 1 では理数推進の試行的な運営ができた。 ② 3 回の講演会を実施した。プレゼンテーション技術と生成 AI、写真から見る気候変動と環境保全、数学と音楽など多方面を加味したウェルビーイングなど、有意義な講演会となった。特に高砂氏の講演をきっかけに、中 3 のマイボトルプロジェクトへとつながった。	① 6 カ年を通したプログラムの体系化。探究の実践により、総合型選抜での大学合格者数を伸ばす。 ② 次年度も年 3 回、工学、国際協力、スポーツ界など様々な分野で活躍する講演者を招き実施。
2 先鋭的・特色的な教育内容の実現	(1) 生徒主体の学校活動	① 学校行事運営 ・陵風祭 ・体育祭 ② 生徒会の活性化 ・生徒による予算編成 ・校則改定への協議会 ③ 部活動での活躍 ・全国大会や国体での活躍	① 生徒が主体的に取り組めたか ② 新しい取り組みができたか ③ 全国大会へ出場できたか	① 生徒主体の陵風祭と体育祭を実施することができた。特に体育祭では生徒は大きな達成感を得ることができた。 ② 生徒発信で新しい取り組みができた。生徒会役員が部長にヒアリングを行うなどし、予算を編成した。また、生徒会と運営委員会の協議の上、一部の校則が改定された。 ③ 自転車部、水泳部はインターハイと国体へ出場。ソフトボール部国体出場。ダンス部、日本拳法部が全国大会へ出場。	① 生徒会を中心に自分たちで計画、調整、準備、実行していく学校行事運営を実践。 ② 生徒会発信で生徒の規範意識向上、校則や学校生活に関わる新たな提案ができるような自治力を育成する。

2 先鋭的・特色的な教育内容の実現	(2) 立命館コース独自の教育	④ 新カリキュラムでの取り組み ・Social Studies, Presentation, プログラミング ・検証試験から上のレベルに ⑤ 外部での活動の推進と強化 ・活動や資格取得を推進する加点措置 ⑥ キャリア形成と学部選び ・提携校推薦ガイダンス ・BKC 研修 ・理系講演・座談会 ・入学前教育	④ 実施できたか ⑤ 実施できたか ⑥実施できたか	④ ネイティブ教員が担当し、英語で社会問題を考え、調べて発表する授業、英語でプログラミングを行う授業を展開できた。 ⑤ 高1より総学力点（学部選考の基準となる3年間の成績点）への加点措置を改定し、理系や英語に関する校外の活動や立命館・APU へのプログラムへの積極的な参加を評価した。 ⑥ キャンパス見学や体験型の研修を通じて、学部を知る高大連携行事を実施することができた。入学前教育については、文系では探究活動、理系では atama+受講、全体ではオンライン英会話や TOEIC の全員受験など例年のものを改定した。	① 生徒の英語力、モチベーション、学習内容の充実など、初年度の課題を整理し改善。 ② 外部での活動の意義やそれによりつけてほしい力などを丁寧に周知する。 入学前教育を前倒しして実施するため、2024 年度より授業として「大学準備講座」を設定する。
	(3) アドバンス ト・グローバル コース	⑦ キャリア形成への企画実施 ・各種プログラム実施（夢ナビ、進路達成プログラム、スタディサブリ進路選択支援プログラム、志望理由書講座、進路座談会、進路講演など） ⑧ 学力向上 ・模試の分析、対策、検証のサイクル ・放課後講座、土曜講座でのハイレベル講座とリメディアル講座 ・スタディサブリ	① 各種プログラムが実施できたか ② 模試の偏差値	① 計画したプログラムを実施し、生徒のキャリア形成への意識を高めることができた。 ② 高1，2とも各コースの目標偏差値を平均でやや下回る結果となった。	① 大学進学だけでなく、どんな大人になりたいのかを考えさせ、キャリア観を形成させる。 ②模試データにより個別の変化を各会議で共有し、多面からの助言と補習や講座を実施する。
3 「開かれた学校」に向けた教育活動の展開 企業・地域・他校との連携	(1) 学校との連携	① 他校との連携 ・立命館中学校・高等学校 ② 海外大学との連携 ・西オーストラリア州 ③ 大学との連携 ・国際教養大学 ・さとのば大学	① 連携できたか ② 連携できたか ③ 連携できたか	① 立命館中学校・高等学校主催の JSSF と国際共同研究に本校生徒が参加、研究と発表を行なった。 ② 包括協定を結び学校を視察した。2024 年度からの連携に向けて計画を進めている。 ③ 国際教養大学を訪問し、2024 年に向けて生徒や教員の交流や研修の計画を進めている。高2でさとのば大学のワークショップを実施。	サイエンスとグローバルに関する対面、オンラインの研修を具体的に進める。
	(2) 地域との連携	① すさみ町との連携 ② 西オーストラリア州との連携	① 連携できたか ② 連携できたか	① Freshers’ Camp において、すさみ町での民泊とキャンプ、町の暮らし体験（ローカルツーリズム）などを実施。新しい仲間と協働しながら、すさみ町との交流を体験することができた。 ② 包括協定を結び、学校視察を行なった。次年度のサイエンス教育、グローバル教育へつなげることができた。	① 継続して実施。 ② SSH と US コースでの活動を実践する。
	(3)企業との連携	総合的な探究の時間での連携 ・高2 ビジネスコンテスト ・中3 マイボトルプロジェクト など	連携できたか	高2では、Playable、関西起業家、象印、オフィスキーワード、レオスキャピタルワークスと連携してビジネスコンテストを実施。中3では、タイガー魔法瓶株式会社と連携して、卒業記念品として自分たちがデザインしたマイボトルを作成。その他、企業5社との連携を進めることができた。	Kubota やコスモ石油など、連携を広げていく。
4 進学実績とキャリア形成	(1) 国公立大学合格実績の向上	京阪神 5 名、国公立 40 名を目標 ・探究での実践を体系化し、総合型選抜での合格者を伸ばす	合格者数	京阪神 0 名、国公立 14 名。達成できず大きな課題が残った。	上位層を学年全体で指導する体制と分析。
	(2) 提携校推薦 (R コース)	① 理系進学者増に向けての取り組み ・ラボステイ ・サイエンスラボ講座 ・理系講演など ② APU 進学者増に向けての取り組み ・立命館 DAY での APU 講演 ・国際交流@APU など	① 進学者数 ② 進学者数	① 理系進学者 45 名。理工学部への進学者は 13 名で、昨年度に比べると志願者増には結びつかなかった。 ② 10 名。APU との連携企画で進学の意識が高まり、第1志望に APU を考える生徒が増加した。	① サイエンスラボや理工学部を教員が知る取り組み。 ② 年度による変動が大きくなりないように取り組みを継続。
	(3) 海外大学への進学	5 名を目標 ・保護者向け説明会の実施	進学者数	進学者は 0 名となった。説明会の参加も減少しており、事前での指導を含めて改善が必要。	学年の進路説明会などに海外大学進学を組み込むなど実施形態の改善。

	(4) 私立大学への合格実績の向上	早慶3名、関関同立100名の目標 ・総合型選抜での合格者増を目指す	進学者数	早稲田1名。明治5名。関関同立29名。 愛知医科大(医)1名。大阪歯科大学2名。 薬学部5名。合格者数増に向けて、指導体制の再構築が必要。	受験への指導体制を再検討。
5 生徒募集	(1) 学則定員の変更を踏まえた入試広報活動の強化	① 大阪市内、北摂地域への広報活動(中学) ② おおさかRクラブでの情報発信 ③ オープンキャンパス	① 重点地域からの受験者数 ② 登録者数 ③ 参加者数	① 大阪市内から42名、北摂地域から2名が受験した。(昨年度は大阪市内から60名、北摂地域から11名) ② 3月末で約180名。入試関連や学校活動の情報を発信した。 ③ 中高合わせて2000名が参加した。	① 塾との良好な関係を継続しながら、北摂、南河内、奈良など受験者の少ない地域を中心に広報活動を重点化。 ② 発信数を増やし広報に繋げる
	(2) US コースの入試広報	国際フォーラム ・第1回 モンテ・カセム氏(国際教養大学学長)、船橋力氏(トビタテ留学JAPANプロジェクトディレクター) ・第2回 堀江未来氏(立命館小学校学長、立命館大学グローバル教養学部教授)、遠山桃子氏(西オーストラリア政府東京事務所所長)、大塚庸平氏(留学情報館代表取締役)	実施できたか 参加者数	国際フォーラムを2回実施。第1回54名、第2回49名が参加した。	授業公開や説明会など、より具体的な教育内容を発信し広報活動を展開。
	(3) 中学入試	① 受験者数1000名を目指す ② 入学者数180名を目指す ③ 前期A日程の受験者160名を目指す	①～③ 目標値の達成	①～③受験者数1206名、入学者数203名、前期A日程受験者は前年度比1.5倍となった。	① 1200名 ② 180名(US30名) ③ 160名
	(4) 高校入試	① 併願受験者数500名を目指す ② 専願(内部を含む)360名を目指す ③ 入学者数400名を目指す	①～③ 目標値の達成	①～③各目標数に対して、併願受験者数276名、専願入学者数308名、総入学者数331名にとどまった。	① 500名 ② 360名 ③ 420名
6 施設設備の整備	(1) 教室設備・改修	① 2024年度に向けた教室の検討 ② 1号館エントランスの空調設備	① 改修完了したか ② 改修完了したか	① 1号館2階と3号館5階を改修し教室数を増やした。 ② 改修完了している。	① 探究やSSHに欠かせない特別教室の移設と設置。
	(2) 情報発信・ICTの改修・充実	① ホームページ新規構築 ② 教員貸与PC ③ サイエンスラボの機器充実	① 新規構築できたか ② 配布完了したか ③ 機器を購入したか	① 新規業者と契約し、ホームページを更新。Be Uniqueをカラフルなトップページで表現している。 ② 全ての専任・常勤の教員にSurfaceを貸与。クラウドやWorkspaceを活用し、業務の効率化が進んでいる。 ③ 立命館大学理工学部より新たにレーザー加工機が貸与された。また、SSHの一環で各種機器を購入予定。	① 受験を考える生徒保護者、本校の保護者、卒業生に向けて情報をよりきめ細やかに発信していく。 ② 教員のICT環境改善とAIの活用を通して、より業務効率化に繋げる。 ③ サイエンスラボを昼休みや放課後に解放するため教員を常駐。SSH教育活動でも活用し、ものづくりを通して理系人材の育成を進めていく。